

ここまでのあらすじをパウロが捕えられたことを記している 21 章 27 節から述べると、

まず、パウロが神殿を汚したと誤解されて群衆から殺されかけたので、ローマの守備隊が割って入ってパウロの身柄を拘束した。その結果、パウロがローマ市民権を持っていることが分かって、パウロの裁判はローマの法廷の裁判となった。そこに、ユダヤ教の最高法院を招集してその意見を聞こうとしたところが、死者の復活を信じるか信じないかのことで最高法院の意見が分かれ裁判ができず、パウロは再びローマの兵営に連れて行かれた。

その後、パウロを暗殺しようとする陰謀があることが分かり、総督が在留するカイサリアへパウロは身柄を移された。そこでフェリクス総督にユダヤ教最高法院から告訴が出されて裁判の法廷が開かれたが、判決をくだすことなく 2 年のときが経った。その間、パウロはフェリクスと妻のドルシラにイエス・キリストを伝道した。

その 2 年後、総督はフェストゥスへと代わり、事態は出直しの格好になったために、パウロが皇帝に直訴する (25:11) ことを申し出た。

今日の 13 節以下のところには、パウロの自身の言葉はなく、もっぱら総督と訪ねてきたアグリッパ王との対話だけで成り立っている。

13 - 22 節。総督フェストゥスと訪ねてきたアグリッパ王とのやり取り。

ここに出てくる「アグリッパ王」は、12 章 1 節に出てきたヘロデ・アグリッパ 1 世の長男で、結局この人がユダヤ人最後の王となった。彼は、小さいときからローマのクラウディウス・カエサル家で育てられ、後に皇帝になるクラウディウス帝 (11:28) とも、次のネロ皇帝とも親友の間柄であった。そして、父のアグリッパ 1 世と同じように、ユダヤ人、ユダヤ教、エルサレム神殿などに大変熱心な人であり、大祭司の叙任権を持っていたと言われている。

このとき一緒にきた「ベルニケ」は、ヘロデ・アグリッパ 1 世の長女で、アグリッパ 2 世とは 1 歳違いの妹。24 章 24 節に登場する「ドルシラ」のお姉さん。夫の死後未亡人となり、兄のところで生活していた。この時、彼女は 21 歳。兄と同じようにユダヤ教とエルサレム神殿には熱心であったと伝えられている。

14 節にあるように、フェストゥスがパウロの件を王に持ち出すのは当然の流れかも。なにしろ二人にとっての妹であるドルシラ夫妻が積み残していったお荷物だから

である。その上アグリッパ2世とベルニケは、ローマにもユダヤ教にも非常に詳しい兄妹であるから、パウロの問題は分かってもらいやすい。それにこの時の皇帝であるネロとアグリッパ2世は非常に親しい間柄でもあり、直訴してローマに行ったときにはどうなるだろうかということを知りたいというのにも都合がよかったと思われる。

フェストゥスがアグリッパ2世に伝えている内容の中心は19節の「死んでしまったイエスという者のことです。このイエスが生きていると、パウロは主張しているのです」、これが問題だ、と的が絞られている。そこで22節、「アグリッパがフェストゥスに『わたしも、その男の言うことを聞いてみたいと思います』」というと、フェストゥスは『明日、お聞きになれます』と言った。」

こういう次第で23節27節までに、翌日の謁見室における場面が記されているわけである。

23節。「アグリッパとベルニケが盛装して到着し、千人隊長たちや町の主だった人々」が一同に集まる。彼らはいわば、政治上の権力者、軍隊の代表者、市民たちの代表者である。これは盛大な場面である。

彼らの前でフェストゥスはこれまでのことを簡潔に述べる。そしてその結論として「彼（パウロ）が死罪に相当するようなことは何もしていないということが、わたしには分かりました」（25節）である。因みに、パウロはここで初めて自分は「死罪に相当するようなことは何一つしていない」ということを聞かされる（23:29、25:18 参照）

罪が無いことを知っているのだから釈放すればよいのだが、フェストゥスはパウロが「皇帝陛下に上訴したので、護送することに決定した」（25節）という。そして護送するに当り「罪状を示さないのは理に合わない、わたしには思われるから」（27節）と言い、ローマ皇帝とユダヤ教の両方を詳しくしている「アグリッパ王」に罪状書きに値するものがあるか「取り調べて」（26節）欲しいと願う。